

木の目草の芽

木の目草の芽

2019年12月23日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料1,000円
申込:047-463-8721
shizenhogo@jac.or.jp
郵便番号00180-4-710688
加入者名:川口章子

《インタビュ》

自然保護委員会担当理事

飯田 邦幸 (いいたくにゆき)さん

聞き手 川口 章子

元川 里美

この7月から自然保護委員会の担当理事に就任された飯田邦幸さんにお話をうかがいました。

「まずはプロフィールからうかがいたいと思います。山との出会いや思い出の山などもありましたらお聞かせください。」

飯田理事 山に登るようになったのは、高校1年生の時に、男女混合5人グループで尾瀬に行ったことがきっかけでした。5人で田代十字路あたりにテントを張って、初めて尾瀬ヶ原を歩いて尾瀬沼まで行きました。そして木道の上で1時間くらい一人で座っていたでしょうか。本当に静かで、遠くに至仏や燧が見えて、なんと

も言えない雰囲気魅了されました。それまでは遠足で行く山登りは、自由ではないしつまらないと思っていたのですが、今思えば、日本山岳会が守った尾瀬で、私は山を好きになったわけですから縁を感じますね。その後すぐに高校のワンダーフォーゲル部に入りました。そこで、天気図の描き方とか様々なことを学んで、ますます山が好きになりました。大学時代は、登攀を好む連中が集まっている「エーデルワイス山の会」に所属しました。実は高校の頃から岩登りも好きでゼルブスト(ハーネス)などの道具も揃えていたのです。両親は山登りをずっと反対していましたが、親への反発もあったかもしれません。でもやればやるほど、できなかつたことができて達成感もあるし、楽しさを覚えましたね。当時は日和田山とか鷹取のグレンデによく通っていました。初めて本番の岩場に行ったのは秋山合宿での北岳でした。翌年の秋には前穂の東壁でトツプをやらせてもらって、とて



も楽しかった記憶があります。紅葉の時期でしたが景色を見る余裕もなかったかもしれません。奥又の池にテントを張って、5・6のコルを越

第140号

<目次>

- P.1 インタビュー
担当理事 飯田邦幸さん
- P.4 第10回 日本山岳会・
森づくり連絡協議会を開催
和田 豊司
- P.6 東京多摩支部・
自然保護講演会報告
報告:河野悠二
- P.8 読書三昧
相良嘉美 著「故郷、緑なれ」
近藤 緑
- P.10 連載コラム
「ライチョウといつまでも」
日吉 健治
- P.11 田中正造が倒れた日
元川 里美

えて涸沢へ下りて、そこからまた稜線が上がって滝谷まで行きました。

それから天山山脈とかを越えてみたいという漠然とした思いもあって、「シルクロードを行く会」というのを当時から作って、大学2年の夏休みにナホトカからシベリア鉄道で中央アジアの方へ行き、天山山脈の末端の方を踏んだこともありました。

卒業してからはOBで監督として学生たちとよく山に行きました。僕が卒業した翌年に事故で部員が一人亡くなってしまい、もう絶対に事故が起こらないようにしたいという気持ちがあったので監督をやらせていただいていたのですが、最終的には学生部員もいなくなって廃部になってしまいました。その後は、社会人山岳会の登高会「嵩(くら)」に入りました。登山指導員の資格も取って東京都山岳連盟の指導教育委員会です。ずっと指導者の養成を行ない、最後は委員長を務めました。その後しばらくは仕事を中心にしていますが、60歳を前に山岳ガイド協会の登山ガイドの資格を取りました。その頃に日本山岳会の委員会にも誘われるようになって、家族登山普及委員会の委員長を経て今回理事になりました。

仕事はこの10月から日本山岳救助機構合同会社に勤めています。国内唯一の総合的な山岳

遭難対策制度を運営している会社です。1年間に山岳事故で支払った救助費用の総額を、加入者(現在9万人)の人数で割ります。そうすると例えば今年は一人当たり3000円の負担です。

年会費は2000円ですが一人当たりの負担は少額ですみます。この制度は自力で山を下れなくなった状態を遭難と定義していますので、病気とか既往症の場合、例えば糖尿病の人が山に登って低血糖になり下りられなくなった場合でも遭難とみなして救助費用の補填金の対象になります。この仕組みは、元々は都岳連が運営していた共済制度が、都岳連から離れて設立されたもので、山ヤの利便性を重視していますのでとても役に立っているという実感があります。登山だけでなく、スキーのバックカントリーや山菜採り、溪流釣りの方も入っています。JAC会員も結構入っていますね。

「JACでは家族登山普及委員会と自然保護委員会の担当理事をされていますね。」

飯田理事 120周年記念事業委員会の担当理事もやっています。それからMCCで読書会なんかも楽しませてもらっています。自然保護委員会の担当理事をと言われたときは正直驚きました。それですぐに全国集会有ると言われて急遽出席したような状況でした。

「自然保護の問題ではどのようなことに関心を寄せておられますか。」

飯田理事 やはりトイレ問題ですね。山に登っている人間が山を汚してはいけないと思っています。ですから携帯トイレを持参することが当たり前になって欲しいですね。表土の薄い日本の山にとっては我々の尿が影響を与えることは明白です。

川口 委員会として扱っているこの携帯トイレはとても良いですよ。袋が厚くて使いやすいです。1回分が原価で350円になってしまいましたが、晩餐会でも販売する予定です。

元川 北アルプスでも少しずつ携帯トイレを使っている登山者が増えつつあるのですが、ある山小屋のご主人の話によると、使用済みの携帯トイレが小屋のトイレの中や脇に放置されたりすることがあるそうです。意識が高まるのは良いことだけれども、使用済みの携帯トイレをどのように回収するのか、あるいは回収せずに自宅まで持ち帰ってもらうのか、地域での方針をまずは決めておかなければならないだろうとおっしゃっていました。

川口 北海道はその辺が進んでいて、知床は早いうちから回収費用も込みで1000円で販売していました。それで使わなかったら返却して100円が戻るという仕組みでした。そこはや

はり回収ボックスをきちんと置いています。ただ、問題は回収してそれを山から下ろす費用です。南アルプスではヘリで運び下ろすだけで100万円はかかるそうです。それで、実際に私も入笠山で使ってみて自宅まで持ち帰りました。が何の問題もありませんでした。多くの人に、使って持ち帰ってもらいたいと思って携帯トイレを売っています。

飯田理事 そういう啓発を日本山岳会としてイニシアチブを執って進めていけたらと思っています。きちんと家まで持ち帰って処理するということのようなルール作りができれば良いと思っています。

元川 排泄物を残すことで起こる問題を丁寧に説明する必要もあるでしょうね。

飯田理事 そうですね。山の表土の薄さとかをよく理解していれば、どれほど負荷がかかるか想像できますし。それにこういった活動は山登りをする人間ひとりひとりの少しの努力で解決できることです。

「今年の全国集会は担当理事に就任された直後のご出席でしたがどのような印象をお持ちになりましたか。」

飯田理事 みなさんとても真面目に取り組まれているなと感じました。支部の方々がそれぞれの活動のお話をされましたが、みなさん自信を

持って熱く発表されていることは本当に素敵なことだと思います。こうした支部の話を本部で吸い上げて咀嚼して各支部に再配分するというのが本部の役割でもあり、僕の仕事なのかなと感じました。支部の日々の活動、例えば東海支部の猿投の森の活動が地域で認められ広がっているという報告とか、そういう報告をいただきたい皆で共有していくということだけでも大変意味があることです。これから日本山岳会の自然保護委員会としてどのように谷内委員長が進めていくか、見守りながらサポートしていくのが私の役目と思っています。

川口 これまでの鳥海山のイヌワシ問題や屋久島のオーバーユース問題も支部の報告から始まった取り組みでした。支部で感じている問題を全国集会などの場で共有して活動を進めていくようにしたいですね。

「今回、古野会長が4つの柱の一つとして自然保護をあげてくださっていますね。」

飯田理事 そうですね。自然保護は日本山岳会の歴史を見てもとても大事なことです。私たちが山をフィールドとして楽しむ者にとつては、山自体が健全でなければ成り立ちませんから、森林や植物、動物を守る必要があるでしょうし、汚染を防がなければいけません。どのように次の世代まで維持させ引き継いでいくかという部

分で、この自然保護の活動は今後もさらに重要になってくる。そういう意味での一つの柱ということだと思います。

どの委員会でも同じと思いますが、クラブの活動らしく、それぞれが押し付けではなくてできることをしながら気兼ねなく自分の意見が言えて、その意見が少しでも反映され実現できるような委員会にしたいですね。

(令和元年11月25日JACルームにて)



第10回 日本山岳会・森づくり連絡協議会を開催

猿投の森づくりの会代表 和田 豊司

JACでは全国で森づくりを行っている。自然保護委員会（以下委員会という）の活動の一環として高尾で森づくりが始まったのは2000年のことである。猿投で東海支部が森づくりを始めたのは2004年、その後宮崎、広島、関西、京滋、岐阜、福井、石川など全国に森づくりの会が広まった。相互啓発を目的に高尾の森づくりの会が中心になって森づくり協議会（以下協議会という）が作られ第9回までは毎年のように開催されていた。ここ数年途絶えていたのを再開し第10回として東海支部が幹事役となって東京大学生態水文学研究所（旧東京大学赤津演習林、瀬戸市北白坂町）の研修施設で行った。

委員会をベースに始まった森づくりの活動は森の中に入って除伐、地拵え、植林、間伐、作業道整備など肉体労働を伴い、限られた区域での長期の活動となる。従来の自然保護と活動形態が若干異なるため協議

会と委員会活動は乖離しがちであった。しかしながら共通の目的や関心、課題も多く今回協議会が主催ではあるが自然保護委員会も参加協力して開催することになった。参加者は5支部34名、古野会長、東海支部からは高橋支部長も参加した。

2019年10月5日（土）は研究所助教の田中延亮氏による基調講演「尾張東部丘陵の森と水の100年の変遷」から始まった。尾張東部丘陵は岡山県、滋賀県と共に日本の3大禿山として有名な地域であった。

すでに江戸時代には陶器で有名な瀬戸の赤津やその背後にある猿投山、東京大学生態水文学研究所のある白坂あたりも禿山であったことがわかる（図1参照）。

現在では大規模な治山活動とエネルギー資源の変化により緑に覆われた都市近郊の緑地帯として機能している。この変遷を



図1 江戸時代の瀬戸と猿投山

1世紀以上にわたりデータをとり続けているのが東京大学生態水文学研究所である。瀬戸の山（猿投山周辺）が禿山だった時代（図2）を経て緑に覆われた現在（図3）まで100年余の川の流量、降水量、気象データ等から豪雨時の森の防災機能や名古屋市と比較した気候変動（温暖化）の違い



図2 治山活動前の猿投山



図3 現在 瀬戸市内から猿投山を望む

など実測データに基づいた報告は森づくりに関わる参加者には非常に参考になった。第10回目の今回は森に生息する動物の観察報告が高尾の森づくりの会と猿投の森づくりの会からあった。獣類は夜間活動が主となるため赤外線カメラによる定点観測

が両支部で継続されており生態系の変化データが蓄積されている。特に高尾ではシカの食害が進行するのではとのデータが示された。各支部の報告では森づくりが沈滞気味である印象を小生は受けた。森づくりを始

めた頃（10年ほど前）のメンバーが現在も中心になっており若い人への啓蒙が課題である。

夜の懇親ではラグビーワールドカップを観戦しながら森づくりの課題や将来の夢を深夜まで語り合った。

翌10月6日（日）は演習林の見学の後、猿投の森づくりの会が東京大学赤津演習林の人工林で、間伐の手順を解説した。100㎡に生えている本数、直径、樹高を計測し最適な間伐率や間伐本数を算出し伐倒する木をマーキングしていく作業を猿投の森づくりの会・人工林グループが行った。

その後、猿投の森（県有林やまじの森）に移り自然観察道から山桜フィールド（日本山岳会所有地）、モニタリング1000（環境省委託事業、東海支部自然保護委員会）観察地、山桜コースなどを見学した。参加者は山桜の巨木に感嘆しつつ散会した。

■東京多摩支部・自然保護講演会報告

「高尾山にも迫りつつあるシカ」シカの
被害について」

講師：高槻 成紀 氏（麻布大学

いのちの博物館上席学芸員）

同支部自然保護委員会主催

日時：2019年10月29日（火） 18時30分
～20時5分

会場：立川市女性総合センター5階第3学習
室

参加者：一般 19名、会員 27名、計46名

今回の講演は、シカによる農林業への被害
だけではなく自然植生への影響および、高尾
山で今何が起きているかを考えてみることに
した。講師は、生態学がご専門の高槻成紀
氏にお願いした。

◆シカ問題の現状

シカは過去30年ほどで急増したが、その原
因はよくわかっていない。その側面としてシ
カの捕獲数が1990年代後半から急増し
ている。また、シカの影響調査では北海道か
ら九州までの太平洋岸の広い範囲で「激」な
いし「強」レベルの被害が見られるようにな
った。「激」とは植物はなく土砂崩れなどの

防災上の問題が発生し、「強」は植物が貧弱
になり多くの植物が減少し、本来の植生から
変形した状態である。

野生動物による農林業への被害は、サル、
イノシシ、ネズミなどでも起きているが自然
植生への被害はシカだけである。

◆シカとはどういう動物か

シカは繁殖力が強く（1歳から妊娠を始め、
2歳以上はほぼ全個体が毎年妊娠する）、植
生幅が広く、群れをなす、の3つが揃ってい
るので植物に強い影響力がある。植物の多く
は食べられたら減少するが、植物の中には、
ハンゴンソウ、ハシリドコロ、ワラビ、ウラ
シマソウ、アセビなどのいやな臭いがしたり、
苦い味がしたり、有毒であるなどの「化学防
衛」する植物と、サンショなどのトゲで食べ
られなくなる「物理防衛」する植物もある。
従って、シカの被害を受けた山では、これら
の植物だけが残っている光景を良く見る。

◆シカの影響の波及効果

シカの食害から森林を守るために柵を設
けた例では、宮城県の高城山島では柵内は森
林ができたが、柵外はゴルフコースのようにな
ってしまった。シカが増えれば植物が減少
し、様々な変化が起きる。奥多摩では東京都

水道局が
作った柵
の内外を
比較した
事例では、
次のよう
なことが
わかった。
柵内には
植物が豊
富だった

が、柵外にはイケマ、オオバアサガラという
シカが食べない植物がわずかに生えている
だけで、地表が裸出していた。地上徘徊性の
昆虫を地面に埋めた紙コップで調べたところ、
柵外でオサムシなどが少なかった。地表
の温度と湿度を調べた結果、柵外では昼間に
地表温度が50度にもなり、湿度も50%程度
に乾燥したことから、オサムシなどにとつて
過酷な環境になったためと推察された。紀伊
半島の大台ヶ原や日光での事例では、シカが
いる場所では草原性の鳥類が増え、森林性の
鳥類が減ることが示されている。山梨県の乙
女高原での調査では、柵内で虫媒花が100
倍も多いことがわかった。このようにシカが



植物を食べるによりさまざまな動物に間接的な影響を与えていることがわかる。同時に土壌そのものへの影響もある。奥多摩では植物がなくなったことにより雨滴が土壌を直接打ち土壌流出から大規模な土砂崩れが起きた。

なぜシカは過去30年ほどに急増したのかは、日本の里山から人がいなくなり野生動物に対する防衛力がなくなったことである。また、シカの影響で森が荒廃し、山の保水力がなくなり土壌流出したことは、今年の千葉県の大雨で被害が拡大されたことでもわかる。



◆高尾山では

東京西部でのシカの分布域拡大は、奥多摩の一部にしかいなかったシカは1992年には奥多摩町全域に広がり、2007年には檜原村を含む山地から丘陵にかけての範囲を覆うようになった。(図参照)

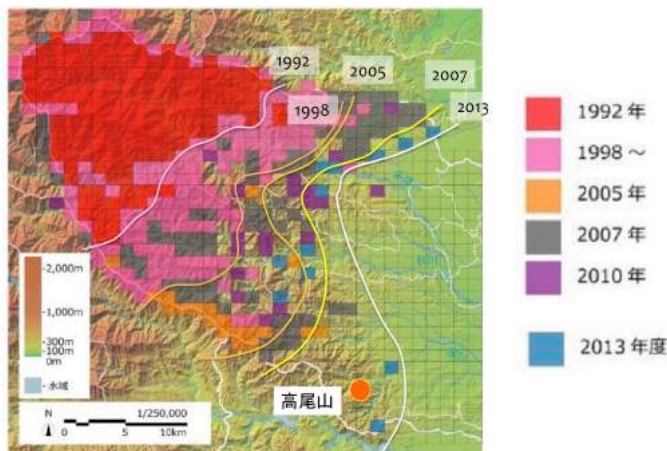
2015年以降は丘陵地の末端に達し、高

尾山にも侵入した。この情報は「高尾の森づくりの会」が撮影してきたセンサーカメラの記録とも対応する。高尾山はさまざまな意味で特別な場所である。シカ問題は農林業被害対策としてスタートし、自然植生への影響が問題視されるようになった。しかし高尾山は観光地としての意味が大きい。ここでシカ侵入が確認されたことは、今後の問題として重要である。2019年の春に「シカの影響以前」を把握する調査の結果は、現時点ではほとんど影響は認められなかったが、隣接する裏高尾では2018〜2019年の冬にアオキなどに強い影響が忽然と現れた。糞調査をしたら、30%がアオキが入っていた。シカの糞調査を継続したいので、位置情報と一緒に提供してください。このことを考えると近い将来、高尾山でも同様なことが起きる可能性は十分にある。そのためにも、事実を的確に捉え、それに対していかなる対策をとるかを管理者、利用者で十分に議論し、スピード感を持って適切に対応する必要がある。現在関係各位に情報提供を準備している。

◆質疑応答

質疑応答では、①植林の管理も大事では②ダニの問題③高尾山のシカ情報のネットワ

ーク化④ジビエ料理への活用⑤オオカミの導入など多岐にわたりましたが、ここでは詳細を割愛いたします。



図：東京西部におけるシカ分布域の拡大経過

講演の最後に、高槻講師が地元の人達と玉川上水の緑の帯を形づくる岸辺の樹木や野草の観察結果を四季ごとに小冊子「玉川上水花マップ」にまとめたご紹介があった。

(文：河野悠二、写真：石塚嘉二)

〈読書二昧〉

近藤 緑

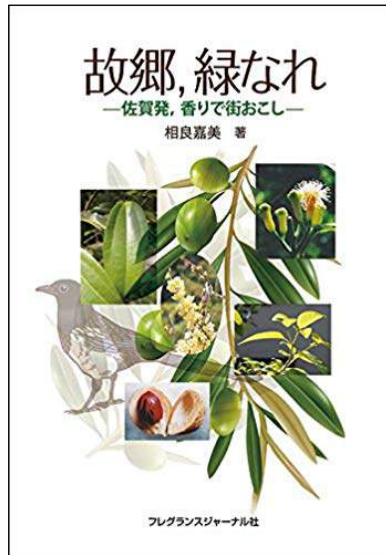
相良嘉美 著

「故郷、緑なれ

—佐賀発、香りで街おこし—」

フレグランスジャーナル社刊

3500円



最近では、シルバーカーを頼りに日常の買物に出る以外、遠出が出来なくなった私は、本を読むよりない生活を送っている。夫の近藤信行の許へは、今も贈られてくる本が多い。病氣療養中の夫に代わって、それらを読んで礼状を書く。それが世間と繋がる私の生き甲斐になっている。

標題の本の著者・相良嘉美氏は佐賀県出身。名門武雄高校から東大英文科を卒業後、長谷川香料(株)に入社。退職までの47年間を、香料ひとすじに生きてきた人である。

この本は、佐賀新聞に連載した「葉がくれに香る」75編に筆を加え、全国各地にある香りの素材を集大成した「香りの植物図鑑」であるだけでなく、人類の歴史と共に歩んだ医学・薬学事典でもある。見開き毎に関係資料として挿入されたカラー写真も貴重で、しかも楽しいものばかりだ。

まず著者の望郷の思いを込めた佐賀の歴史から始まる。「クスシ(臭し)木」の多いSAGA。インドにはSAGAというマメ科植物があり、その実4粒を1グラムとして計量したとか、マレーシアでは街路樹になっていて国産自動車第1号がSAGAと命名されたという小話が面白い。

香りを採取するアルコール蒸留技術は、西暦1000年頃にイスラムで始まり、それが16世紀にフランスに伝わり、やがて日本にももたらされた。佐賀藩主鍋島家居館跡には薬品の蒸留に使われた釜跡があり、それは「蘭引(らんびき)」と呼ばれた。

植物の分類は「科」「属」「種」の順で分け

られ、最後に命名者の名がつく。続いては、クスノキと同じクスノキ科シナモン属のセイロンニッケイ・中国のカツシア・日本のニッケイ・ヤブニッケイ。クスノキ科で属は違うが香りを珍重される植物として月桂樹(ローレル)・クロモジ・アオモジ等の効用を歴史と共に紹介。

照葉樹林は、ヒマラヤ山系ブータンから雲南・江南を経て西南日本に伝わって来たという。縄文の昔から、雲南系の日本人はモチモチした食感を好み、粘つくサトイモ・ナガイモ・ワラビからハトムギ・オオムギ・コムギ等を焼畑で作っていた。パサパサ好みのインドから渡来した陸稲や豆類もモチ性に改良され、なれずしや乾燥納豆・醬(ひしお)を作った。後に醬が味噌・醤油に、なれずしが握りずしに変わって行く。

日本人は香りには淡泊で、香油は馴染まなかった。ヒツジや野生動物を食べて暮らしてきたヨーロッパと、魚介類や森の恵みで生きて来た日本人との違いがある。古来、日本ではドングリや野生イモを水にさらしてアクを抜く。その潔癖感が「油の西洋と水の日本」の違いとなり、物事を「水に流す」国民性にもなっていると説く。

香りを求めて世界を駆け巡った著者の鼻には、あらゆる植物が抽出した香りとなって感じられるようだ。シナモン・オリブ・カカオなどから身近な花々や柑橘類の皮までが、その効用と共に紹介されている。著書の後半は大航海時代以後にもたらされた野菜や果物の解説だが、故郷を離れて移りすんだ鎌倉近辺で目にするチャノキ・ワサビ・菜の花が登場してくるのも楽しい。ジプシー女の髪にかざられたジャスミンの香りに惑わされる歌劇「カルメン」や、ユーミン（松任谷由美）の「春よ来い」の一節をひいてジンチョウゲを語ったりするかと思うと、夏目漱石「三四郎」でヘリオトロープを、「真の文明は村を破らず」（田中正造）の言葉で文明社会のもたらす自然破壊にふれたりもする。最後は「保護政策」に頼らない世界に開かれた米作りを提言している、佐賀人らしい骨つばさを覗かせる。「佐賀の乱」以来、佐賀は正義感に富んだサムライの国である。

これは別件だが、この春、若い友人だったJAC前図書委員長・三好まき子さんが亡くなった。その追悼の席で、私は「彼女は若い頃に学んだ日本ジャーナリスト専門学校・青地晨先生を敬愛した自由人だった」と話した。夫が出席したら、きつとそれを語っただろうと思つたから。第二次世界大戦末期の言論弾圧で中央公論社と改造社の編集者が検査された「横浜事件」。青地晨もその当事者の一人だった。喋つた後で、門前の小僧の私は、石川達三『風にそよぐ葦』を読み、三好さんから教え子たちが編集した青地晨遺稿集『同じことをみずみずしい感動で言い続けたい』をひもといたりした。驚いたのは彼も佐賀県人だったこと。いよいよ佐賀人のサムライぶりを痛感した。

著者・相良嘉美氏は博学の人である。その叡智と共に芸術全般への多岐にわたる造詣の深さを感じる。お会いしたことはないが、病軀をおして今も執筆活動を続けておられると聞くと、やはりサムライの気風を思わずにはいられない。相良夫人の泰子さんが、小島鳥水の孫であることを考えると、鳥水もまた銀行員・登山家であるだけでなく文筆と風流の人であり、維新の波に乗り遅れた四国高松藩のサムライの出であった。この本で、相良夫妻の香りを求める世界旅行の足跡を追体験するのも面白い。JAC図書室にも寄贈されている。

（緑爽会員）

◆購読料とカンパを

ありがとうございます

〈2019年度〉 敬称略

小野寺正英（奥州市丹沢区）・齋藤長作（渋川市）・新妻徹（札幌市中央区）・増田達治（藤沢市）・江花俊和（福島県耶麻郡）・太田義一（加賀市）・河野直子（池田市）・間瀬泉（新潟市伊勢区）カンパ含む・島田稔（東京都新宿区）・関塚貞亨（横浜市神奈川区）・山本敏子（東京都江戸川区）カンパ含む・鳥橋祥子（東京都杉並区）・田村佐喜子（松本市）・田井具世（相模原市）・平野紀子（群馬県利根郡）・石岡慎介（市川市）・福田光子（秋田市）・伊藤秀輔（広島市）カンパ・織方郁英（東京都世田谷区）延島冬生（東京都小笠原）・権藤司（安曇野市）・辻橋明子（東京都港区）

合計 二万九千円

◆自然保護活動にカンパ

新妻徹（札幌市中央区）・平野紀子（群馬県利根郡）・小西奎一（多摩市）・白鳥勝治（静岡市）・仙石智子（静岡市）・匿名（船橋市）
年次晩餐会展示会場（三千円）

合計 二万八千円

連載コラム

「ライチョウといつまでも」

日吉 健治

⑥なぜライチョウは生き残れたのか

ニホンライチョウは氷河期の遺存種と言われていますが、本来地上で最も寒冷な地に適応していたこの種族が、ここ日本のような温暖な地で今日まで生き残ることが出来たのは、いったいなぜでしょうか。

この理由については、以前紹介しました信州大学・中村浩志名誉教授と東邦大学・小林篤博士の著作「ライチョウを絶滅から守る!」の中で詳細に考察されています。

この著作によりますと、小さな奇跡の幾重もの積み重ねが今日までライチョウが生き残ることが出来た「大いなる奇跡」を生み出したとされています。

今回はこの中村先生らの考察による、ライチョウ生き残りの理由を紹介します。

理由(1) 高山帯の存在

まず高山帯とは何かと言うと、森林植生の垂直分布からの分類で日本では森林限界から上部を高山帯と呼んでいます。

日本の緯度では本来森林限界が高く、中部

山岳程度の標高では高山帯は存在しえないのですが、偏西風による山岳域の強風、偏西風と日本海の暖流による日本海側の多雪が森林限界を押し下げ、高山帯が出現したのです。

このライチョウが生息可能な高山帯が存在したことが奇跡的であり、ライチョウ生き残りの理由の一つとなったのです。

理由(2) ハイマツ帯の存在

併せてハイマツ帯の存在も重要でした。

ハイマツは極東地域に分布し、ライチョウと同じく氷河期に日本に入ってきた植物です。

森林限界上部の高山帯に分布するハイマツは、ライチョウにとり隠れ家であり営巢地でありその実は食べ物にもなります。

日本の高山帯にハイマツが存在したこともまたライチョウ生き残りの理由です。

理由(3) 日本文化の存在

日本には古くから里、里山、奥山という概念があり、そのうち奥山は神が住まう場所、

極楽や地獄に通じる場所、死者が集まる場所、農業にとって重要な水源となる場所など、色々な形で山を敬う文化を築いてきました。

そして奥山に住むライチョウは神の鳥として、山岳信仰により殺生から免れてきました。もしこうした文化が無く、キジなどと同じ

く狩猟の対象となっていればライチョウは現在まで生き残ることは出来なかつたでしょう。日本特有な文化の存在もライチョウ生き残りの大きな理由の一つです。

理由(4) ライチョウの適応力

最後に、最も重要な生き残りの要因として挙げられるのが、ライチョウ自身の適応能力の高さと進化です。

ライチョウは、日本特有の山岳環境、四季、植生に合わせ独自の進化を遂げてきました。

年3回の換羽、季節に合わせた繁殖行動や生息場所の移動など見事に日本の高山に適応したのです。

このようにいくつもの要因が相まって、今日までライチョウが生き残れたという「大いなる奇跡」が生まれたのです。

(日本山岳会員)

(参考文献)

中村浩志「ライチョウ」鳥学会誌 56巻2号

同「雷鳥が語りかけるもの」山と溪谷社

同「二千年の奇跡を生き延びた鳥ライチョウ」

農山漁村文化協会

中村浩志・小林篤「ライチョウを絶滅から守

る!」しなのき書房

田中正造が倒れた日

元川 里美

小学校6年生の時だったと思うが、自分の誕生日に起きた過去の出来事を調べるという宿題を出された。私の誕生日、8月2日を調べると、これといって特別なことが起きたことはなかったのだが、「田中正造が倒れた日」であることがわかった。ちょうど国語の教科書で氏の偉業を紹介していたこともあって、しばらくは事あるごとにそのことを得意になって友人たちにふれ回ったものだ。今秋、各地に甚大な被害をもたらした台風19号の豪雨で、渡良瀬遊水地の貯水率が最大貯留量の95%にまで及んだという話を聞いて、ふとその田中正造のことを思い出した。

渡良瀬遊水地は栃木・群馬・埼玉・茨城の4県の県境に位置する、日本最大級の遊水地で、明治時代の終わり頃から治水目的で整備された。足尾の山々から流れ下る渡良瀬川や思川の洪水をそこでいったん引き受けることで、下流に続く利根川や江戸川流域の洪水被害が緩和される。今回の台風でもその役目を十分に果たしたようだ。普段は広大なヨシ原の湿地帯で、公園として利用されている。平成24年にはラムサール条約湿地に登録され、

水鳥たちの楽園にもなっている。しかしこの場所にはかつて一つの村の日常があった。栃木県下都賀郡谷中村。明治39年の廃村まで、現在の遊水地内の一角にその村は存在していた。もともと幾つもの川が合流する地点であり、昔から氾濫に見舞われながら、一方で洪水は山から豊かな土壌を運んでくる恵の水であることも村人たちは知っていた。ところがある時期から度重なる洪水に悩まされるようになる。渡良瀬川源流域にあたる足尾銅山周辺の山林がごとく枯死してしまい、山の保水能力が失われたことが原因とされる。さらに、鉍毒が洪水とともに下流域一带に広がるようになったため、時の政府は有毒物質を沈殿させ無害化する目的で渡良瀬遊水地の整備を計画し、谷中村民は立ち退きを強要されることになった。

当時、衆議院議員だった田中正造は現在の栃木県佐野市出身で、故郷の災難に胸を痛めて足尾銅山の操業停止を国に請願し、明治天皇にも直訴を試みた。しかし富国強兵政策の最中であって、操業停止が叶うことはなかった。その後、正造は谷中村に移り住み、村人とともに立ち退き反対運動に専念するが、河川調査から村へ帰る途中に病で倒れてしまう。

それが大正2年8月2日のことであった。この8月2日という日付は正造の関連資料の中では必ず触れられている。時代の波に翻弄されていた谷中村民や渡良瀬川流域の人々にとっては、一つの強靱な志が思考停止に陥った日であり、絶望を意味する忘れがたい日であったに違いない。正造はそのひと月後の9月4日に73歳で死去し、谷中村民たちは北海道への移住を余儀なくされたという。

「真の文明は、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし。」という言葉を残した田中正造は、人権擁護と自然保護の先駆者と称される。その思想は現在も故郷で引き継がれ、地元の市民グループは長年にわたって足尾に緑を取り戻すための育樹活動を続けている。(自然保護委員)



田中正造像
(佐野市郷土博物館)

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈九月度〉

報告・連絡事項

- ① ライチョウ絵葉書の増刷について
* 4枚1組で千部増刷し、27日に納品予定。

* 英文の説明文に入っていない「1700羽」は次回増刷時に記載を検討。

* 今後、他の絶滅危惧種の植物などを加えセット化し、販売することも検討する。

② 「木の目草の芽」について

* 139号(全国集会報告号)の発行を9月中から10月4日(金)に延期。

* 新設する代表メールアドレスを記載する。

協議事項

① 年次晩餐会での展示について

* 支部合同会議で説明する展示協力の依頼状を作成。パネルの展示、各支部の発行物や地元の自然観察ができる施設のパンフレット等を置く。支部から寄せられた資料で冊子を作り、その中からパネルを作成する。
* 支部の活動の概要を10月28日締め切りとして出してもらおう。上記冊子はその後も充実させる。

* 歴史についての詳細な展示は100年史や山岳、山のバックナンバーや新聞記事な

どの写しならば可能だろう。

* 統一的なパネルは谷内委員長が順次まとめていく。活動の動画があればモニターで流すことも考えられる。

* 展示スペースは、10mのボード2面。

* 展示協力は各支部の自然保護委員にもお願いする。

〈十月度〉

報告・連絡事項

① マナーノート英文版250部が自然保護委員会に提供された。

協議事項

① 年次晩餐会での展示について

* 10月いっぱい材料集めをして、11月にパネル作り等を行う。パネルは大判で印刷したものをスチレンボードに貼る。展示の流れは、上高地等の写真をバックにした表題、展示の趣旨説明、委員会設立前・設立後の年表、設立前のトピックとして西穂高のケーブル、尾瀬ヶ原ダム開発などを当時の新聞記事等をコラージュにしたパネルを掲示。その後は支部の多様な活動を展開する。

* 材料は外部への活動周知のためのツールとしてリーフレットに仕立てたい。

* 各支部の活動の動画があれば、iPad 複数台で流して展示できればよい。

* ライチョウ絵葉書で募金をお願いする。

② 2020年全国集会の開催地について

* 日程は2020年7月4日(土)～5日(日)。場所は吉野・金峯山寺聚法殿(吉野ビクターセンター)。分科会は開かず、講演を複数本立てる。宿泊は「太鼓判」。

* 年次晩餐会后、早めに下見をする予定。

③ 自然保護委員会振替口座、総合口座の開設について

* 口座開設には①JACと委員長の関係がわかる書面、②自然保護委員会がJAC内での存在を示すもの、③活動に実態がわかるもの、④活動のルールがわかるもの——の提出が必要。④については新たに規約作成が必要役員も3名程度必要。規約はJACの委員会規程をベースに作成予定。

* 全国集会前には口座を開設したい。また、自然保護委員会は立替が多いのでデビットカードの口座も作ることを検討する。

◆編集後記◆年次晩餐会の展示『日本山岳会の

自然保護活動の歴史と今』をたくさんの方が見きてくださいました。JAC創立当初から始まる長い年表は特に圧巻で、その歴史の重さに改めて身の引き締まる思いでした。▼「木の目草の芽」の発行が遅れておりますことをお詫びいたします。本年もご協力くださり有難うございました。元川